

第28回 大阪府学校教育審議会 概要

日 時：平成20年5月7日（水）13：30～16：15

場 所：ホテルプリムローズ大阪 「高砂の間」

出席委員：竹内会長、米川会長代理、一色委員、大國委員、尾崎委員、川戸委員、
中井委員、横井委員、森田委員、吉村委員、脇本委員

◎：会長 ○：委員 □：事務局

◆前半

- ◎：今日は前回の続きとしての「チーム力の向上」と新たに「志や夢をはぐくむ教育」についての2点について審議していただく。「チーム力の向上」は前回の意見を事務局でまとめているが、新たなご意見があればどうぞ出してください。
- ：今日の資料の最後のほうにある「教育コミュニティづくりの推進」についてだが、これまでもそうであったが、これからの10年も教育は行政だけで解決できない。家庭や地域などをまきこんで教育再生を図る必要があると思う。以前に能勢町で中高一貫教育がうまくいっているということ聞いた。しかしながら、大阪はほとんどが衛星都市であり、能勢町のように3世代で同居している割合の多いところは少ないように思う。祖父母が子どもを教育するという能勢町のモデルは大阪府全体でそのままはうまくはいかないと思う。ある意味3世代同居はその地域が固定社会だといえる。ところが、大都市圏ではおそらく、若いときは借家、その後マンションに引っ越すなど流動的で教育コミュニティがどれだけ機能するのか、コミュニティは世代間の繰り返しにより作られるもの。私としては教育コミュニティを補強するものとして、教育クラブというものはどうだろうかと思っている。サッカーや野球など好きな人がクラブをする。それはエリアで排除するコミュニティとは違う。それでコミュニティを補強できないか。次の10年の中で大切なことと思う。
- ：教育コミュニティは、固定した形のものでなく、ひとつのムーブメントとして、今後とも取り組んでいきたいと思っている。社会教育委員会の中でも目的志向でのつながりも大切であるという意見も出た。
- ◎：クラブとコミュニティは矛盾しないもの。コミュニティの反対はアソシエーション。クラブはアソシエーションだが、この2つは補強しあえる関係にあると思う。さて、ここで、議論を本題に戻して「チーム力の向上」について、本日欠席の委員からのコメントを紹介させていただく。

<コメント>

学校評価のガイドラインを作成することは重要であるが、学校評価を学校改善に結びつけることが何よりも大切である。そのためには、評価を改善につなげるための仕組み作りが必要であると思われる。

外部の専門家によるチームの力の育成については、臨床心理士やキャリアカウンセラーなど外部の専門家が支援を行う際には、その支援の仕方は専門援助型と連携促進型に分けてとらえることができる。前者は専門家が教員集団とは独立に活動するタイプ

で、後者は教員集団と連携しながら活動するタイプである。

府立高等学校におけるキャリア・コーディネータ、キャリア・アドバイザー派遣事業の経験から、今後は、教員組織としてのチーム力を向上させるために、連携促進型の支援を行っていることが望ましいと考えられる。

- ：チーム力の向上も大切だが、そのためには校長先生のリーダーシップというか、その資質が問われる。すでにやっていると思うが、校長先生のあり方についても評価、議論してもらいたい。
- ◎：校長の資質は非常に重要である。この間、学校組織の改善で中間管理職をつくった。行政組織でも課長や補佐の役割が重要だ。教育長だけががんばっても仕方がない。そういう意味で、新たな職は重要。また、それはキャリアパス、経験をつむという意味でも必要だと思う。
- ：校長のリーダーシップは非常に重要な問題だ。また、准校長、首席教諭、指導教諭など、キャリアパスという部分で重要だと思う。学校というのは、担任をしていると、子どもを相手に指導力を発揮することはあっても、大人をどうまとめていくのかは少し違う力が必要だ。この前、首席教諭になった教員のいる学校の先生と話す機会があったが、「なぜ首席教諭に選ばれたのか分からない」という話であった。それはその決め方というか、首席教諭の力量、選任の透明性、公平性の中で決められているかどうかの問題と思った。それはチーム力にも影響してくる。
- ：大阪府は学校自己診断が定着している。しかし、元気な学校づくりに有効に活用されているかは問題があると思う。貝塚市で教員アンケートを取ったが、評価結果を学校づくりに活かしているかどうかについては、「活かしている、大方活かしていると思う」が54%と半数ちょっと。「結果について議論しているについては」23%。学校評価自己診断については、前向きに捉えているが、学校改善には活かされていらないと思う。学校の自己評価能力を高めていくことが必要だ。校長のリーダーシップも重要だが、分析の手法を含めて行政からも指導、支援をしていただけたらいいと思う。また保護者、地域も含めて、学校評議会を学校評価の中でも活用していき、学校に関心をもってもらって、学校の応援団になってもらってはどうか。そういうことが大阪らしい展開だと思う。
- ：校長のリーダーシップ、チーム力の育成の課題ということで、現在、府立学校経営支援チームが取り組んでいる。問題を抱えているところに府が支援していくことは大切なことだと思う。そういう支援チームを充実していくべきである。専門家との連携、促進についても、こういった課題解決のためのチームの取り組みの中で、さらに充実していただきたい。また、非常事態が起きた際の連絡体制、対応マニュアル、マスク対策等についても府教委として支援していくべきであると思う。
- ◎：学校として危機管理体制も重要な観点である。
それでは、次に「志や夢を育む教育」について、事務局からの説明をお願いする。

<事務局からの説明>

- ◎：今、資料に添って説明を聞いたが、大阪の子どもは規範意識などあまり出来ていない

ように思った。子どもが笑うというが、単に笑っていればいいという問題ではない。笑う以前に問題があるように思う。

- ：「こころの再生」府民運動が、本年度で3年目を迎える。昨年度のフォーラムはすばらしかったし、全小中学生に配付した「子どもファーストデイクーポン」（毎月第3土曜日に家族で出かけると割引等が受けられる）など様々な取組みにより、少しずつではあるが運動の認知度が上がってきているように感じる。しかし、学校からの発信にとどまっていることも確かだ。もう一歩、府全体として押し出しが必要。

今、本当に子どもたちに必要なのは「お笑い」でない。「笑い」すなわち笑顔。そのためには、学校だけでなく社会全体で子どもを見まもり、育む必要がある。道徳は家庭、地域の中で学べる環境づくりや取組みが更に必要。

ただ、地域の安全パトロールに参加しているような人でも、自転車で併走し、おしゃべりしている人もいる。これを子どもが見たらルールは守らなくてもよいと思ってしまっても仕方がない。大人と子ども両方を啓発していく取組みが必要だ。

- ◎：事務局からもいろんな取組みがなされていることが紹介されたが、難しい問題だ。特効薬はなく、漢方薬的にやるしかないのではないか。大阪らしい独特の提案があればよいのだが。前にも言ったが、私が見させてもらった高槻の高校の取組みはよいと思った。普通の高校より授業が早く始まる。誰が来ても挨拶をする。校長はとにかく「生徒を見てください」と言っていた。進学率も上がってきていると聞いており、自信の表れかと思う。こころの教育もいいが、形式から入ることも重要だと思う。元来、日本人は形式を大切にしてきた。最近の風潮として形式を軽視して内容が大切という考えがあるが、それが全てではない。あいさつ運動とか、朝の読書とか、形から具体的に学校に応じた取組みをすることから規範意識が生まれるのではないか。

一方、規範意識が低下しているというが、いつの頃と比べての話なのかと思う。私の若い頃と比べたら、基本的には規範意識は上がっていると思う。しかし、大阪が全国に比べて低いというのは気になる。

- ：私の通っていた学校は、学校内でのルールを守ることが大変厳しかった。廊下を走ってはいけない。ぱたぱたと走っている足音が聞こえただけで櫛がとんでくるような学校だった。そう考えると、今は自由で楽になっていると思う。「ルールを守る」ということを教えるのを誰がするのかわからないのが現代であり、「守る」ことを強制とらえることが、ひずみであると思う。
- ：学校のきまりは守られないといけない。それと学力はリンクしている。また、学校に期待するものとしても非常に大きいものがある。ルールを破ったら学校で叱るべき。それをないがしろにするから問題が起きる。今は子どもを一人前の大人として扱い、尊重しすぎて、ルール自体を教えていない。そのため高校生が小学生のような振る舞いをしたり、小学生が大人のような物言いをする。ルールを守るということを、小さいときから学ばないと、世の中に出てから苦しむのは彼らである。甘やかしていたら大人になるのではない。そういう意味で、今の大阪の教育は反省するべき点はある。
- ：規範意識に関するデータだが、普通は中学校から下がるもの。それが小学校高学年で下がってきているのはショックであった。学校教育が長ければ長いほど、規範意識が下がるのは何とも言えないことで、これは、学校教育の中で改善するべき点である。

しかし、今は学校も減点主義や押し付けだけの教育では無理だ。それを加算方式に変えていくことが必要である。それが、あいさつ運動であり、朝の読書の取組でもある。

- ：『自由と規律』（池田潔、岩波書店、1949年）という本を読んだ。テーマは規律を守ることと世の中を変えること。かなり昔の話であるが、イギリスのパブリックスクールは指定の理髪店があるほど、ルールが厳しいという話があった。しかし、イギリスの人たちは世の中を変えるアイデアも多く出すという。ルールを守るだけの人間では世の中の進歩はない。ルールを守り、不自由を覚え、その意味を考え、変えたいと思った人間こそが新たなルールづくりの担い手になり得るのだと思う。ルールを守ることと、新たなルールを作る人間を育てること、この両輪が重要だ。
- ：戦後は自主性や主体性を尊重してきた。しかし、そこに落とし穴があった。自主性は基本的なルールの上に立つべきものである。私は労働組合にいるが、企業のトップの方は、求める人物として、コミュニケーション能力があって、当たり前のこと出来る人を求めている。そういう意味では、当たり前にも人の話を聞く、挨拶をする、そういう繰り返しを学校で学ぶことが必要である。学校現場に長くいて感じたことは、親子のあり方が変質してきていることだ。社会の基本的なルールを教えるのは学校だけでなく、本来は家庭であるべきだ。子どもは親を見て育つ。今の親は子どもにどれくらい言うべきことを言っているか。我々の時代は親から言われるのが嫌で、早く大人になりたい、親を超えたいと思ったものだが、自尊感情だが、今の子どもは人より飛びぬけていることを恐れる。出来ることがあってもそれを出すことを控える。人と違うことでいじめられることを恐れる。それとリンクしているのではないか。分析をされていたら教えてもらいたい。
- ：分析したことはないが、委員の指摘に加えて、中・高生という発達段階で厳しく自己評価をしているのではないかと思う。規範意識については、今は教え込むということではなく、教材「心のノート」で、社会で生きていく集団の中で一人ひとりが輝くためにどうしてルールが必要かなどを学んでいる。
- ◎：人はルールをなぜか守るのか。それは自分の集団への愛着心の印と思う。学校への愛校心があればルールを守ると思う。守らないということはそれがばらばらになってきているということ。根源的に考えると学校だけでの対処は難しいが、ここは学校教育審議会なので、学校においてどのような手だてがあるのか考えるべきである。学校への愛着が増せばルールを守るようになるのではないか。戦前は規範が非常に厳しかったが、戦後はその逆になってしまっていて極端となった。小学校1年生にはまだ自主性というものはないと思う。そこできちんと悪いことは悪いと言い、学年を追うごとに言わなくなっていくのが普通ではないか。
- ：規範意識が高学年で下がっていくことの分析として、発達段階があると思う。自分に置き換えて考えると、小学校低学年のときは非常におとなしい子だったが高学年になってからは、「遅刻をしてはいけない」というルールに自分でしたくもないのに、「遅刻をしなければならぬ」ということを課していた。それが成長の過程であったと思うが、今は時間を守る大切さを知っている。「守れ」と言われたら、守らない子どももいる。反発することで見出すこともある。自意識が出てくる小学校高学年は、そういうことをうまく利用するべきだ。守るべきことは1つか2つは絶対に守らせるという

ように、構造化を図るべきと思う。学力を高め、自尊感情を上げるためにも、生き生きとルールを守らせることが必要である。押さえつけられるときに、人間は反発するか、投げ出すかどちらかになる。完全に押さえつけるか、全くの自由にするかの二極分裂を避けることが大切であると思う。

◆後半

◎：夢や志について突き詰めて議論すれば日本社会全体の問題になるが、本日は学校でできることに絞って、具体的なご提案、ご意見をいただきたい。

○：子どもたちは夢を持って将来を切り開く気概を持ってほしい。また、個人だけでなく、社会にも関心を持ち、「次の社会をつくっていく」という気持ちを持ってほしい。これまでの経験から、子どもたちは上からの押し付けである「〇〇すべき」「〇〇しなさい」ではなく、子ども自身のお手本となるいいモデルと出会った時に、ものすごく努力するケースが非常に多い。昔は地域にあこがれの大人やお兄さんがいたが、今の子どもは、これらのよきモデルに出会う機会が少ない。このような中、学校教育の中でも、子どもたちが「がんばっている大人」と出会う機会を提供することが大切である。

大阪では自然体験、福祉・職業体験など積極的に取り組んできており、これが様々な大人と接するよい機会となっており、これをさらに充実することが大切である。また、読書活動を積極的に進めることは、読書による様々な刺激を通じて、子どもたちの夢がはぐくまれ非常に重要である。

○：規範意識のグラフなどを拝見して、小学校(特に低学年)、中学校、高校と年代に分けて考えるべきと思う。理解する力のない小学校低学年においては、川のごみ拾いなど、経験・体験からルール、規範意識を教えていくべきである。また、小学校の中学年から高学年になると、教員や保護者の言うことにわざと反発する時期であり、相手の立場にたって考えること、思いやりの大切さを教えていかないと、ただ反発するのみと思う。

さらに、高校生になると知識・学力が根底になり、理解力も高まる。この段階では、ここでごみを捨てたときにどうなるのか、誰に迷惑がかかるのかなど、近い将来の社会人として、これからの社会がどうなるか、どうしていくのかという観点からの教育が必要である。

学力についても同じことが言える。小学校の低学年では、机の前にじっと座らせる学習姿勢がまず大切であり、中学、高校と経るごとに、中身自体の理解の深まりにつながっていく。

◎：委員の発言にあったように、幼いときは理屈を言っても仕方がないのに、戦後の自由主義のなかで、どんなことにも理由を説明しなければと思われているが、そうではないように思う。規範意識も発達段階に応じた教育が重要である。

○：地域、保護者も含めた規範意識となると、クレーマー対応が大きな問題になる。授業参観中に携帯電話で話したす保護者もいる。教員の大量退職後、残る30代・40代は保護者に意見を言いにくい世代であり、今の段階からバックアップが必要である。

○：規範意識も含めて、子どもたちが色々な思い、夢を持つには家庭の役割も大きい。小

学校の入学前説明時に、事務的なことだけでなく、子どもとどう向き合うかなどの観点から保護者にアプローチできればよいと思う。また、入学前であっても、乳幼児の検診時に、先輩ママなどによる談話、講座などを通じて、保護者への啓発に取り組んではどうか。

最近の子どもは想像力に欠けており、これが、いじめの深刻化の理由のひとつにもなっている。いかに身近なケースを教材として提供できるかが問われている。

連合が格差社会について2万人アンケートを実施した際、地域の絆が強いところの方が、格差があるとの認識が低いという結果であった。地域の絆、力があると孤独感が薄まり、

保護者のことを考えていくには、地域力、地域全体で子どもを育てる機運が必要である。

- ◎：規範意識など大阪の結果が低いのは、学校の秩序の問題か、私立に流れる率が低いのか。義務教育における最近の公私比率はどうか。
- ：記憶によると、小学校から中学校に入る段階で約1割、高校進学では7：3の公私分担比率があるので、中学校から私立に行く子どもを入れると、高校では公：私は6：4となる。
和田中で聞いた話によると、杉並の荻窪あたりでは5割が中学校から私立。和田中校区では3割。
大阪は中学までは公立の意識が高い。
- ：県別暴力行為件数でみると、千人率で大阪は5.4(全国平均2.6)
- ：全国学力調査の結果は国立、私立も含めての結果であり、この規範意識などのデータには私立も含まれるのか。
- ：私立は別に集計のため、本日提示のデータは公立のみのデータ。
- ◎：私が私立のことを聞いたのは、公立の状況が悪くなれば私立に流れてしまうのではという懸念があったから。
- ：公私の比率に関しては、10%未満と記憶している。学校崩壊などが起きると、その地域では中学から私学に流れる傾向はある。
- ：データによると、中学校の公私比率は 昭和 62 年 96.2：3.8 → 平成 18 年 90.4：9.6となっている。
- ◎：知事は「教育日本一」と言っているが、実際にどうしていくつもりなのか、今の大阪の教育の事態を把握しているのかと思う。
- ：学力についての夢が低いことについてどう考えているのか。どう取り組んでいくのか。学力がなければ夢も実現しないこともある。
- ：残念ながら、資料2-1-3などで全国に比べて低い結果。
子どもの学習意欲は学力の大きな要因。今学んでいることが将来にどうつながるか、自分がどうなりたいかが想像できにくくなっている。これが学力に大きく影響。学校では、早い段階からキャリア教育を進めているところ。
- ：キャリア教育というと、卒業してすぐの就職や技術の習得と解釈されがち。もっと広く社会貢献や大学教育などの意識までつなげる必要がある。
- ：狭い意味でとらえるのではなく、子どもたちに社会で活躍している人たちとの出会い

なども含めて、広い意味でのキャリア教育を進めている。

- ：この間、議論があり最後の段階で「志」や「夢」を議論となっているが、唐突な感じがする。どのようにビジョンにつながっていくのかイメージしにくい。
- ◎：これらはキーワードかと思う。
報告事項については、他の審議会について意見は難しいが、参考としてお聞きするという位置づけかと思うがいかがか。
- ：会長からおっしゃていただいたように、子どもの健康・体力の部分と、地域教育については、別の審議会での議論の状況を報告させていただく。
また、「志」と「夢」については、これまで学校種別で議論いただいたが、今回は、縦割りではなく、「こころ」の部分に焦点を当てて横串での議論をお願いしている。
- ◎：時間の関係上、全体や補足意見については、次回以降の答申案の議論の中でいただきたい。

◆報告事項

- ：教育コミュニティについて、大阪は積極的に進めてきたが、高校生、青年が抜けてしまうことが多く、この力をもっと活用できればよいと思う。この点について議論があったか。
- ：教育コミュニティづくりは、アクセスなどの観点から小学校区単位が妥当という意見もあったが、これまで大阪は連続した成長を育む観点から、あえて中学生までを対象としてきており、直接には高校生は対象にしていない。
今後を見据えた協議の中では、教育コミュニティづくりの取組みの中で育った子どもたちが高校生・青年となって、リーダーとして関わっていくことが重要との共通認識があった。